

第十五章  
後退途上国

「無理してお祭りなんかする必要はないのじゃ！」

大家がテレビの中の山本に向かって叫ぶ。すると田中ももっと大きな声で叫ぶ。

「これを教訓に全世界が一つにまとまって新型コロナウイルス感染阻止に立ち向かおう！」

大家が田中をにらみつける。山本が大家をなだめようとする。田中が首を横に振る。

「勘違いしないでください。僕もオリパラは中止するか延期するのがいいと思っています」

「う……なに？」

大家の口元が緩む。

「お祭りは派手にワイワイするもの。スポーツの祭典だから記録は大事でしょうが恐る恐るするのは本末転倒です。要はパーツとできる環境が整うまで……東京でなくてもいいから延期すべきです。四年ごとに拘らず最高のお祭りだから大騒ぎできるときにすればいい」

大家が「なるほど」と頷くと山本が微笑みながら語りかける。

「人間誰でもルールに縛られることを嫌がるけれど権力者はルールがお好き。もちろん庶民を縛るルールだけだ。さて競技は厳格なルールで行うべきですが、オリパラ自体が利権化して巨大化したので奇妙なルールに縛られるようになりました。まず開催できる国は大きな国ばかり。飢えに苦しむ国や治安が悪い国の国民から見ればさしてオリパラは興味のわくモノではないかも知れません。そこにコロナウイルスの攻撃。ここは再起動ではなく一旦スイッチを切ってオリパラの意義を見つめ直す必要があると思うの」

山本が一息入れるとオリパラ会場の映像が消えてシマウマを追いかけるライオンの映像に代わる。

「一方、人類以外のあらゆる生命体に格差はありません。あるのは熾烈だけれど公平な生存競争。でも今や人類がその競争に割って入って公平さを阻害している」

「その被害者が絶滅種や絶滅危惧種か」

田中の発言に山本は頷きながら続ける。

「ところが格差は人類が地球に登場してすぐに広がることになったの。言い換えれば権力者の登場ね」

「動物の世界の権力者、例えば百獣の王ライオンと比べれば月とスッポンほどに違うなあ」

「人間は地球に君臨する裸の王様よ」

「なるほど。動物や植物がいくら警告しても耳を貸さないもんな」

すると大家が腕を組んで割り込む。

「だからウイルスが警報を発したのじゃ」

「さつきも言ったとおり最近のオリパラは盛大だけれど、曲がりなりにもある程度の平和が何とか確保されているから開催できるの」

『『ある程度』世界情勢が安定していないと祭典は開催できないということじゃな』

「そりゃそうでしょ。戦争や戦争までいかなくても深刻な冷戦の時、オリパラは中止されたり

ボイコットされたりしたわ」

ここで画面に問題のある国々を示す世界地図が示される。治安が安定しない国や地域。言論弾圧で市民が抑圧されている国など、様々な問題を抱えた現状がわかりやすく色分けされている。

「決してすべての国が平和状態にあるとはいえない。つまり世界中で様々な問題が勃発しているわ」

「どこの国の権力者も『コロナウイルスとの戦いに勝利するために……』と今は戦争中、つまり非常事態だと認識している。何を勘違いしているのか『ウイルスに打ち勝った証』としてオリパラを開催して全世界に勇気を与える」などと馬鹿なことを言っておる権力者もいる」

「相手が小さいから油断しているのよ。ウイルスは手強い相手よ」

「しかも大義を持って戦っているのじゃ。地球を守るといふ大義じゃ」

「そう。人類から全生命体を守るといふ壮大な大義だわ」

「なるほど」

\*\*\*

画面から大音響が響く。サバンナに大粒の雨が、そして雷鳴が……黒い雷雲で画面は暗いが、時々瞬間的に明るくなる。稲妻が高空を自由奔放に駆け巡る。さすがの百獣の王ライオンも岩陰に身を隠す。枯れたようにたたずむ木々には近寄ろうともしない。どこにいようと雨を凌

ぐことはできない。ましてや木に身を寄せれば命を落とすことになる。

乾いた大地は湿原となり植物が芽吹き花が咲き狂う。昆虫が花に恋をし、草食動物が若葉をせつせと胃袋に収める。まず強制的なダイエットから解放されたと思いきやその魅力ある肉体はライオンたちの餌食となる。必死に逃げても強力なハンターの前では無力に近い。仲間が生贄になると警戒などすぐ忘れてライオンがそばにいても目の前の草を口にする。もちろん満腹のライオンが狩りを再開するのははすべてを消化してからになる。

あらゆる植物や動物が食うか食われるかの熾烈な戦闘を繰り返しているが、それによって種が絶滅することはなかった。それどころかお互いなくてはならない生命体で一つの種が絶滅するとかかなりの種が共倒れになる危険性がある。それほど生態系は複雑に補完し合っている。無駄な生物など全く存在しない完璧な生態系が存在している。それが地球である。

確かに人類が現れるまでも絶滅した種はある。それは隕石の衝突や気候変動など急激な環境の変化によるものだった。食欲旺盛な巨大恐竜にしても他の種を絶滅に追い込むことはしなかった。

\*\*\*

繰り返すが、生命体は進化しながらお互いを尊重し絆を深めて子孫を残し種を継続させる。これが生命体の基本原則だ。もしあらゆる生命体に知恵というものが宿っているとすれば、この基本原則を完全に理解して尊重するはずだ。その底流に流れているのは「公平」だ。

命というものはすべて平等で、巨大な鯨も象も小さなアリやアメーバの命に優劣はない。これは地球に住む生命体だけの原理ではない。

たとえば地球の生命体が絶滅すれば宇宙全体に存在する生命体すべてが絶滅するかもしれない。どこかの惑星の生命体が絶滅すれば気の遠くなるような時間が流れてからであろうが、地球上の生命体はもちろんのことこの宇宙のすべての生命体が絶滅するかも知れない。

ところがやつと月まで行ったに過ぎない人類が我が物顔でほかの生命体を食<sup>は</sup>んでいる。それだけではなくともあろうか同じ人間なのにたとえば豊かでない開発途上国の人々を見下す。

一方、豊かさに憧れる開発途上国の国民は「自分たちを裕福にしろ」と先進国に要求する。「肉を食わせろ」「文化的な生活をさせろ」と。他方、先進国の国民は散々エネルギーを思うまま消費して贅沢な暮らしをしてきたのに地球温暖化問題を持ち出してカーボンニュートラルを全世界に押し進めようとする。

「さあ『これからは先進国並みの裕福な生活を送れるようになる』と開発途上国の国民が思った矢先に原子力発電はだめ、石炭発電もだめ、プラスチック製品は使わないように……しかもゴミの処分をしてくれと先進国は自分たちの都合だけを押しつけてくる。これじゃやっつけられないよなあ」

田中が発展途上国の国民を代弁して息巻く。

「確かに先進国は我が世の春を経験したわ。ただし長い人類の歴史から見ればほんの一瞬。こ

れからは先進国といえどもその国民はもう贅沢はできなくなる。先進国の国民も発展途上国の国民も贅沢な生活などできない」

大家がテレビ画面の山本の口を押さえ込む。

「山本さんの言いたいことはわかる。じゃが富裕層という大金持ちがいる。世界一を争うぐらいの富裕層は中進国程度の財産を保有しておるといふ。そうすると先進国や発展途上国にかかわらず富裕層はこれからも贅沢三昧できるのじゃ」

「大家さんの言うとおりで。富裕層の大家さんが言うのだから間違いない」

「アホか。富裕層というのは宇宙旅行ができる大金持ちのことを言うのじゃ」  
「なるほど」

ここで山本が消えて世界に名だたる富裕層、の中には資源大国の王様も含まれるが、そのほか大国の大統領や独裁者、恐怖政治を行う軍事政権の首長などの名前はなし。権力を持っている者、即富裕層とは限らない。

「この中ですでに宇宙旅行……と言っても高度百キロメートルほどの上空ですが……」  
今度は田中が山本を遮る。

「たったの百キロメートルか。京都と神戸ぐらいの距離ですね。それぐらいの高度では地球全体を見ることはできない。でも行ってみたいなあ」

「そういう意味ではアメリカの宇宙飛行士は月まで言って地球の出を見ましたね」

「宇宙ステーションの高度はどれぐらいなのじゃ」

「京都大阪間の五〇キロメートルぐらいかしら」

「それぐらいの距離なら通勤圏内だなあ」

あんぐり口を開ける田中に大家がたしなめる。

「横移動なら簡単じゃが、縦移動は難しいのじゃ。行った先には酸素がないのじゃぞ」

この鋭い意見に田中が恐縮する。すると先ほどの名簿のような一覧表が大写ししてから山本が微笑む。

「大家さんはこの中に入っていませんが、すでに宇宙旅行をした人がいます。それに今の宇宙船に乗るには金だけではなくある程度体力も必要です」

「若く起業して莫大な財産をため込んだ富裕層に限られると言うことか！」

田中が叫ぶような声を出す。

「そればかりじゃないわ」

田中と大家は山本を黙って見つめる。山本が目を閉じるとこれまで月や宇宙ステーションに向かった宇宙飛行士顔写真と名前をテレビに映し出す。

「皆さんそれなりの実力者です。でも将来を背負う若い人とはいえないでしょう。嫌みではないですが将来を背負う若い人を教育するにはふさわしい方々ですが、まったく宇宙旅行に可能性のない若者を宇宙に送り出す必要があります」



田中がじつと山本を見つめる。

「開発途上国の若者を宇宙に送り出す必要がある！」

「そうじゃ。それが富裕層の義務じゃないか。微力だがわしは全財産をなげうつてもいい。夢のある若者が宇宙というものを体験する必要がある」

「なるほど！」

しかし、田中はうなだれる。

「もう若者とはいえないなあ。それにこの国は後退途上国だし」

## 第十五章 後退途上国